

令和2年1月1日に思う

謹んで新春のおよろこびを申し上げます

令和2年 元旦

年頭にあたり、村民皆さまのご健康とご多幸をお祈り申し上げますとともに、皆さまにとって、穏やかで実り多い1年でありますようご祈念いたします。

昨年も、日本列島は自然の脅威の前になす術もなく立ちつくされた1年でした。今年こそ、「想定外」の言葉が飛び交うことのないよう祈りつつ、互いに備えを怠らないよう知恵を絞らなければなりません。

そうした中で心とんだのが、天皇陛下のご即位にかかる一連の行事に見えた、両陛下の国民に寄りそう笑みであり、11月に来日され被爆地（長崎・広島）を訪問されたフランシスコ・ローマ教皇の、人々を包みこむような笑顔でした。お二人の心の底からの祈りである「世界平和」への願いは、私には「不穏な動きを見せる国際情勢への憂い」ともとれ、心を打ち、ひしひしと伝わるものでありました。

令和の時代も、平和が「絶対の主役」であることを願ってやみません。

昨年11月16日「源流の日」。村制施行130周年記念式典は素晴らしいお天気にも恵まれました。式典では、多くの先人や先輩が、ダム問題に翻弄されながらも、それに臆することなく高々と「水源地の村づくり」をかかげ、果敢に行動してきたことを確認し合い、そんな思いを引きつぐ私たちは、先人への感謝と明日への飛躍を誓ったところです。

このほど、その思いを後押しするかのようにより、「確かな報告」がありました。決して「おとそ気分」の話ではありません。

それは、昨年2月に地域おこし協力隊活動報告会において基調講演を行っていた藤山浩先生（持続可能な地域社会総合研究所長）から、その後の人口ビジョ

ンや介護分析などに関して行われた中間報告の内容です。その報告では「人口減少が緩やかになりつつあり、子どもたちが増えている。またこの1年間だけでも数字はさらに好転している」と、目標が達成されつつあることが報告されました。

この成果はもちろん、村づくりの方向が間違っておらず、取り組みを加速させている結果であると言えますが、何より村民皆さまの「地域を愛する誇りと、村を思い憂う心」が日増しに強くなり、村の活性化への行動となっていることが大きいと感じています。

町村は今、総合計画や地方創生総合戦略の折り返し地点にあります。後期（第2期）計画に着手するこの時期に、とても心強い成果であると受けとめています。

ただ、このような結果が出ているとはいえ、村が依然として厳しい状況下にあることには変わりありません。今後も引きつづき、徹底して「都市にはない豊かな暮らしを築くこと」の具現化を図ります。皆さんもぜひ我々と力を合わせていただきたいと思います。

「令和」

平和が輝き、人々が美しく心を寄せ合い、文化が生まれ育つことを、年のはじめに祈りたいと思います。

今年も、どうぞよろしく願いいたします。